

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：34506

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K17323

研究課題名（和文）小学生、中学生のいじめと認知の歪みに関する研究

研究課題名（英文）The role of moral disengagement on bullying and victimization at school.

研究代表者

大西 彩子 (Onishi, Ayako)

甲南大学・文学部・准教授

研究者番号：40572285

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：

本研究では認知の歪みといじめ経験との関連について検討した。認知の歪みを測定するための項目を先行研究をもとに中学校の教師とともに検討し、中学生1年生から中学生3年生までの期間に縦断的調査を行った。その結果、いじめの加害・傍観経験が多い生徒は認知の歪みが高いことが示された。また、認知の歪みの自己中心性は男女ともに短期的には直接的に、長期的には間接的にいじめの加害経験を増加させることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知の歪みは、いじめ加害者の罪悪感や恥などの感情を抑制し、いじめ行動を促進することが予測される。しかし、国内で認知のゆがみといじめとの関連を検討した研究は数少ない。本研究は、認知の歪みの自己中心性が男女ともに短期的には直接的に、長期的には間接的にいじめの加害経験を増加させることを明らかにし、認知の歪みの観点からいじめ防止に有用な知見を提供したことに意義がある。

研究成果の概要（英文）： The present study examined the relationship between cognitive distortions and experiences of bullying. A longitudinal study was conducted during the period from first-year to third-year of junior high school students.

The results showed that students who bullied peers has higher cognitive distortions than students who were not involved with bullying. The self-centeredness of cognitive distortions was found to increase bullying behavior directly in the short term and increase bullying behavior indirectly in the long term.

研究分野：教育心理学

キーワード：いじめ 認知の歪み 中学生

1. 研究開始当初の背景

平成 25 年 9 月に日本で施行されたいじめ防止対策推進法では、いじめは「教育を受ける権利を著しく侵害し、その心身の健全な成長及び人格の形成に重大な影響を与えるのみならず、その生命又は身体に重大な危険を生じさせるおそれがある」ことを認めた上で、学校現場にいじめ防止のための基本方針の策定といじめを防止するための委員会を設置することを義務付けている。しかし、いじめの予防法に関する国内の知見は、未だ十分に蓄積されていないのが現状である。

Bandura (1996, 2002)が提唱した Selective Moral Disengagement (選択的道德不活性化)は、向社会的な感情を抑制し、反社会的行動を引き起こす認知の歪みのメカニズムとして国内外で注目されており、青少年の反社会的行動や攻撃行動との関連が様々な研究で認められている (Barchia & Bussey, 2011; Gini, Pozzoli, & Hymel, 2014)。いじめ加害者は罪悪感や恥の感情が喚起されると、被害者を攻撃することが難しくなる。しかし、いじめでは被害者に対する心理的、物理的な攻撃行動が長期間継続され深刻化することがある。こうした深刻ないじめにおいて認知の歪みは、いじめ加害者の罪悪感や恥などの感情を抑制し、いじめ行動を促進していることが予測される。しかし、国内で認知のゆがみといじめとの関連を検討した研究は数少ない。そこで、本研究では中学校 1 年生から中学校 3 年生の 3 年間に注目し、認知の歪みといじめ経験との関連について縦断的に検討する。

2. 研究の目的

本研究では中学校 3 年間の認知の歪みが同時点およびその後のいじめ経験とどのように関連するのかを縦断的に検討することを目的とした。本報告書では、中学生のいじめ経験と認知の歪みとの関連について検討した研究 1 と中学校 1 年生時の認知の歪みがいじめの加害経験および中学校 2 年生時のいじめの加害経験に及ぼす影響について縦断的に検討した研究 2 について報告する。

3. 研究の方法

調査対象者・本報告書の研究時期：公立中学校 2 校の 305 名(男子 110 名, 女子 98 名)を対象とした。本研究に用いた調査は生徒が中学校 1 年生時の 2016 年 12 月(Time1)と中学校 2 年生時の 2017 年 6 月(Time2)に実施した。

本報告書に用いた質問紙の構成

(a) 認知のゆがみ：Caprara, Pastorelli, & Bandura (1995)の選択的道德不活性化 (SMD) を参考に中学校教員 4 名と話し合った上で中学生用の項目を作成し、5 件法で質問した (18 項目)。

(b) いじめの役割行動(BSR)：Self-reported behaviors during bullying episodes (Pozzoli & Gini, 2010)を参考にいじめの加害行動を学校で過去 6 カ月間にどの程度経験したのかを 5 件法で質問した (5 項目)。

4. 研究成果

<研究 1> 学会発表 2017

(1) いじめ経験の類型化

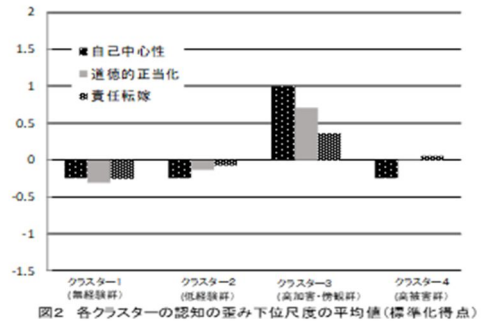
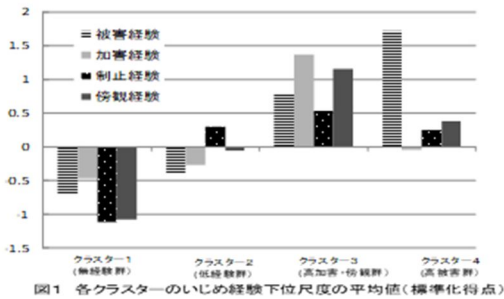
いじめ経験を類型化するため、いじめ経験の下位尺度(加害経験, 被害経験, 制止経験, 傍観経験)に対し、Ward 法, 平方ユークリッド距離による階層クラスターを行った。3~5 クラスターで検討したところ、解釈可能性から 4 クラスターが適切と判断された。各クラスターのいじめ経験の標準化された平均値を図 1 に示した。

(2) いじめの役割と認知の歪みとの関連について

クラスターの特徴を明らかにするため、いじめ経験を従属変数とした MANOVA を行った。その結果、いじめ経験 4 群間の多変量主効果が有意であった ($F(3,241)=138.00, 57.33, 50.84, 96.52, p < .001$)。多重比較では、被害経験 ($1 < 2 < 3 < 4$), 加害経験 ($1, 2, 4 < 3$), 制止経験 ($1 < 2, 3, 4$), 傍観経験 ($1 < 2 < 4 < 3$) という結果が得られた。

クラスター 1 は、4 つの下位尺度の標準得点すべてが 0 以下の値であったため、いじめに関する経験がほとんどないと判断し無経験群とした ($n = 59$)。クラスター 2 は、制止経験が 0 より高いが、被害・加害・傍観において経験が 0 より少ないため低経験群とした ($n = 114$)。クラスター 3 は、加害と傍観のいじめ経験が 4 群中で最も多いため、高加害・傍観群とした ($n = 43$)。クラスター 4 は被害経験が 4 群中で最も多いため、高被害群とした ($n = 29$)。

さらに、4 クラスターと性別を独立変数、認知の歪みの3 下位尺度を従属変数とした MANOVA を行った。その結果、クラスター4 群間の多変量主効果のみが有意であり ($F(3, 239) = 23.82, 10.84, 3.61, p < .001, p < .001, p < .05$)、性差や交互作用は認められなかった。多重比較では、自己中心性(1, 2, 4<3)、道徳的正当化(1, 2, 4<3)、責任転嫁(1<3) という結果が得られた(図2)。これらの結果から、いじめへの関与が高い生徒は認知の歪みが高いことが示唆された。



< 研究 2 > 学会発表 2019

認知の歪みがいじめの加害経験に与える影響の時期的検討

認知のゆがみがいじめの加害経験に与える影響について、因果モデルを構成し、共分散構造分析を行った。その結果、データとモデル全体の適合度は良くなかったため、モデルの改善を試みた。推定値が有意でないパスの除去およびモデルの解釈可能性から、最終的に図1のモデルを採用した。

また、男女差を検討するために修正モデルを基に男女別の多母集団同時分析を行ったところ等値制約を置かないモデルが ($\chi^2(30) = 29.957, p < .468, CFI = 1.000, RMSEA = .000, AIC = 179.957$)、等値制約を置いたモデル ($CFI = .998, RMSEA = .014, AIC = 181.512$) よりも適合度が良く、表1のような結果となった。ただし、全てのパスに有意な男女の違いは認められなかった。自己中心性は男女ともに短期的には直接的に、長期的には間接的にいじめの加害経験を増加させることが明らかになった。

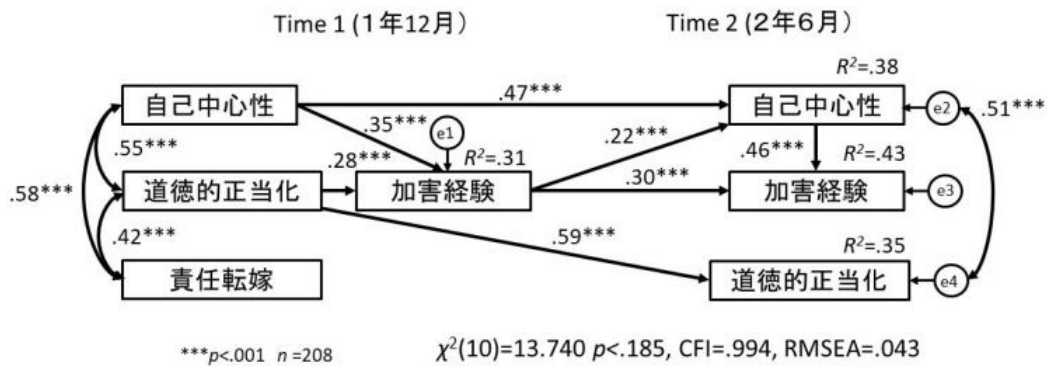


図1 認知のゆがみといじめ加害経験の長期的因果モデル

表1 男女別認知のゆがみと加害経験の因果モデル

標準化係数	推定値		z値
	男子(n=110)	女子(n=98)	
自己中心(1年12月)→加害(1年12月)	.35***	.40***	.413
道徳正当(1年12月)→加害(1年12月)	.24*	.26**	-.014
加害(1年12月)→自己中心(2年6月)	.26***	.18*	-.789
自己中心(1年12月)→自己中心(2年6月)	.51***	.44***	-.735
加害(1年12月)→加害(2年6月)	.25**	.28***	.562
自己中心(2年6月)→加害(2年6月)	.41***	.54***	1.877
道徳正当(1年12月)→道徳正当(2年6月)	.62***	.53***	-.947
相関係数			
自己中心(1年12月)⇔道徳正当(1年12月)	.60***	.52***	.513
責任転嫁(1年12月)⇔道徳正当(1年12月)	.45***	.43***	.487
責任転嫁(1年12月)⇔自己中心(1年12月)	.58***	.58***	.407
e5⇔e4	.60***	.46***	.663

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大西彩子	4. 巻 18
2. 論文標題 いじめのアンケートを作る・読む・活用する	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 子どもの心と学校臨床	6. 最初と最後の頁 81-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 1884-0310	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kawabata, Y., & Onishi, A	4. 巻 48
2. 論文標題 Moderating effects of relational interdependence on the association between peer victimization and depressive symptoms.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Child Psychiatry and Human Development	6. 最初と最後の頁 214-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10578-016-0634-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大西彩子
2. 発表標題 中学生のいじめ経験と認知の歪み
3. 学会等名 日本教育心理学会第59回総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大西彩子
2. 発表標題 いじめの選択的道徳不活性化についての研究
3. 学会等名 日本社会心理学会第57回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 大西彩子・木下雅博・Kawabata Yoshito
2. 発表標題 中学生の認知の歪みがいじめ加害経験に与える長期的影響,
3. 学会等名 日本社会心理学会第57回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 原田誠一(編), 井原裕, 香山リカ, 齋藤環, 種市摂子, 野村総一郎, 和田秀樹, 伊勢田堯, 生地新, 原田誠一, 神田橋條治, 山登敬之, 山崖俊子, 大西彩子, 清水康夫, 岩宮恵子, 渡辺俊之, 池上和子, 山中康裕, 神山昭男 他28人	4. 発行年 2017年
2. 出版社 中山書店	5. 総ページ数 365 (66-69)
3. 書名 -3 いじめ被害/加害の影響 精神医療から見たわが国の特徴と問題点 part メンタルクリニックの果たすべき役割	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----